様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月３０日現在

機関番号：１５１０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０５２０１２３
研究課題名（和文）　ハプスブルク帝国下のチェコにおける宮廷社会と音文化の展開

研究課題名（英文）　The Development of the Czech Court Musical Culture in the Habsburg Monarchy

研究代表者
内藤　久子（NAITO　HISAKO）
鳥取大学・地域学部・教授
研究者番号：６０２６３４５６

研究成果の概要（和文）：本研究は、ハプスブルク帝国支配下のチェコ諸領邦において展開された宮廷社会を背景に、後期ルネサンスからバロック期に至る「チェコ音楽」の発展の諸相を、政治史・社会史・文化史の視座から読み解き、更に同地域における「人文主義」の開花について深く洞察することにより、同時代の「中欧文化」の歴史の一端を明らかにするものである。その成果は、同時期の「チェコ音楽」を、近現代の「チェコ音楽」創成への礎石と位置づけ、ヨーロッパ文化史の中でその卓越した発展の様態を解明するものとなった。

研究成果の概要（英文）：In this paper, I tried to demonstrate, politically, socially, and culturally, the historical developmental aspects of Czech music from the Late Renaissance to the Baroque era, in the social background of Czech Court, under the long oppressed political system of the Habsburg Monarchy, and to clarify the history of the Central European culture, considering the development of the civilized 'Humanism' in the Czech region. The results could mainly confirmed that we had ranked the prominent musical aspects from the Czech Renaissance to the Czech Baroque in the cultural history of Europe, regarding them as the foundation toward the formation of Czech modern music.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,100,000	330,000	1430,000
２００９年度	1,000,000	300,000	1300,000
２０１０年度	800,000	240,000	1040,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学（音楽学）
科研費の分科・細目：芸術学・「芸術学・芸術史・芸術一般」
キーワード：チェコ・ルネサンス音楽、チェコ・バロック音楽、プラハ、ルドルフⅡ世宮廷音楽、ボヘミア文化、チャールズ・バーニー、ハプスブルク家

１．研究開始当初の背景

(1)筆者は、2002 年度に科学研究費補助金（研究成果公開促進費・学術図書出版）の助成を受けて『チェコ音楽の歴史－民族の音の表徴－』（音楽之友社）を刊行し、その中で 19 世紀の「チェコ国民楽派」や 20 世紀前半の「チェコ前衛音楽」を熟成期とする「チェコ芸術音楽」の歴史的発展の軌跡を、貴重な楽譜とともに跡づけながら、「音楽のナショナリズム（民族主義）」や音楽表現にみる「民族と

アイデンティティの構築」を通して、中世から現代までの音文化の動態的プロセスを「民族の精神性」とも重ね合わせ、考察を行った。その後もスメタナ、ドヴォルジャーク、ヤナーチェクといった近現代のチェコ音楽をめぐる洞察を続ける中で、そのような近現代を中心とする「チェコ音楽」の遺産が、いわゆる宮廷社会から市民社会（ブルジョア中産階級）へと移行する過程で見られた、つまり民族や国家形成と音文化の創造というイデオロギーを包含しつつ、20 世紀初頭にこの小国が独立国家となる為の、まさに社会的変革の過程で生じた音楽史の所産であったと考えることで、「何がその基盤となったのか？」、その芸術上の高みに至るルネサンス、バロック時代に着目する必要があると考えた。

(2)具体的には、16 世紀以降、約 400 年に及ぶ中で（1526～1918）、ハプスブルク帝国の支配下に置かれた「チェコ諸領邦」が、18 世紀後半から 19 世紀前半にかけて「民族復興」をスローガンに文化的復興や再生を掲げるに当たり、「そのような近代国家へと向かう文化発展の礎石が、早くも中世の時代から、ルネサンス、そしてバロック期を経て脈々と受け継がれ、構築されてきたことによるものである」との仮説を立て、16～17 世紀のプラハの状況、中でもルドルフⅡ世の時代のプラハが、カレル四世の時代以降、再びヨーロッパ文化の中心地となり、何より音楽都市として隆盛をきわめたというその実態に関する研究の必要性を強く認識するに至った。

(3) 1620 年の「白山の戦い」により、15 世紀から発展してきたチェコ・プロテスタント音楽が一掃される一方、カトリック教会が勢力を持ち直す 17・18 世紀のチェコ・バロック音楽の発展の様態を、社会史・政治史と絡めて考察する必要性を強く感じるとともに、何よりも亡命音楽家たちがその後のヨーロッパにおいて古典派音楽の発展に寄与した点に注目することで、小国チェコの芸術音楽の発展がヨーロッパ全体の音文化の発展に如何に寄与したのかといった問題について、単に音楽作品のみならず、宮廷社会を背景とした同時代の政治や社会、文化の有りようを含む広い視座から、チェコ・バロック音楽の研究を進める必要性を感得するようになった。

２．研究の目的

(1) 本研究の目的は、1526 年以降、ハプスブルク家の属国下に置かれていた「チェコ諸領邦」を舞台に、絶対主義王制時代の 16 世紀末、後期ルネサンスから 17･18 世紀バロック期にかけて展開された宮廷音楽の実態を、歴史的視座から調査・研究し、とりわけ「チェコ・ルネサンス音楽」および「チェコ・バロック音楽」の発展の様相を、それらを取り巻く宮廷社会や政治との関わりの中で読み解きながら、ハプスブルク家やボヘミア諸領邦の動向、さらに「人文主義」の開花について深く洞察することを通して、最終的にはヨーロッパ文化の地平における「中欧チェコ」の音文化発展の意味を考察するとともに、さらに中欧の都市文化がいかにヨーロッパの音芸術の発展に寄与するに至ったのかを、第一次資料をもとに明らかにすることを目的としている。

(2) 14 世紀に栄華を誇ったカレル四世の時代を経て、チェコ・ルネサンスおよびチェコ・バロックの芸術文化が熟成し、豊かな音文化の遺産が創成されたが、このようなチェコの伝統的な文化遺産が、やがて 18 世紀後半以降の「民族復興」の基盤を形成するものとなったという仮説の下に、後期ルネサンス時代の都市プラハについてまず洞察することとした。即ち、ハプスブルク帝国の「チェコ諸領邦」において展開された絶対主義王制時代の宮廷社会について、これまで国内では殆ど紹介されることのなかった「都市プラハ」を中心とする音楽生活の全貌を明らかにしようとした。中でもルドルフⅡ世の時代のプラハはヨーロッパ文化の重要な中心地であり、音楽都市としても隆盛を究めたとされており、同時代の音楽を含む後期ルネサンス時代のチェコ文化の発展を、社会史の視点を導入しながら解明することをねらいとしている。

(3)1620 年の三十年戦争中に勃発したチェコ悲劇の断章である「白山の戦い」後の「チェコ・バロック音楽」の特殊性とその多彩な諸相について、その歴史的流れを的確に把握する為に、主に 4 期に分けて考察することとした。とりわけチェコ中部に位置する「オロモウツ宮廷カペレ」の活動実態をより一層明確化するとともに、プロテスタントが一掃された後のカトリック教会音楽の浸透、そしてプロテスタント音楽家の亡命の実態ならびにマンハイム宮廷に仕え、前古典派シンフォニーの基礎を築いた「マンハイム楽派」の音楽生活について、政治史や社会史的背景も合わせて探究することで、政治や社会の大きな変革が如何に芸術の発展に作用したのかという大局的な課題についても考察を深めることとした。

(4) (3)により、従来 19 世紀「国民楽派」の活動のみに大きな関心が寄せられてきた同地域の音文化の諸相を、ヨーロッパ芸術音楽の発展過程の中で、連続的かつ立体的・体系的に捉えながら、およそ 16～18 世紀を中心に、宮廷社会の中で繰り広げられたチェコ人による「音芸術の世界」を、都市生活や社会・政治・文化との関係性から再構築していくことを目指すものである。

３．研究の方法

(1)初年度の研究では、まずチェコ史の流れを的確に把握した上で、都市プラハの繁栄と宮廷社会の様態を明らかにすることから着手した。こうしてチェコ王国（ボヘミア王国）がハプスブルク帝国の一諸領邦となって独立性を失う 1526 年以降を対象としながら、特に 16 世紀ルドルフⅡ世の時代のプラハに焦点を当て、再びヨーロッパ文化の中心地として繁栄をきわめ、「声楽ポリフォニー」の最盛期を迎えた「プラハの宮廷カペレ」について調査した。何より、同地域の歴史的考察を正確に掌握した上で、16 世紀プラハを中心とする「後期ルネサンス文化」の開花とともに、同時代のプラハ宮廷や、ハプスブルク家による「文化的庇護」の実態、それにルドルフⅡ世の宮廷カペレの音楽生活等に光を当てながら、主にチェコ文化やヨーロッパ文化に関する図書資料の収集を積極的に行うと共に、入手した文献を通して、歴史的かつ文化的考察を深めることで、本研究課題をめぐる重要な背景を徐々に明確化していった。

こうした資料収集を中心に、プラハ城ではどのような音楽生活が営まれたのか、また宮廷礼拝堂で鳴り響いていた教会音楽の発展についても調査・分析しながら、チェコ地域における「ルネサンス・ポリフォニー」の全体像を纏めた。資料収集、特に第一次資料の入手については、チェコ語の資料を現地図書館を通じて調達することが可能となり、また現地の友人を介して一部文献の複写を入手、また情報機関を通して文献資料の収集とそれを読み込む作業を中心に進めていった。

(2)続いて、フス派の敗北を招いた「白山の戦い」（1620）後のバロック音楽の特殊性とその多彩な音楽の美質について、細かく 4 期に分けて考察することとした。即ち、初期・中期・後期バロック、さらにバロック末期への変遷の過程を、主にマンハイムへの亡命音楽家の軌跡も含めて描写し、16～18 世紀の宮廷社会を背景とした、チェコ人による音芸術の世界を社会史・政治史・文化史との関係から実体的に描き出す為に、『ニューグローブ世界音楽事典』を常時、参照しながら、チェコ音楽文化史や西洋文化史関係図書、さらに貴重な楽譜の入手や音源の入手などを楽譜・文献の海外輸入を手がける「アカデミア」（東京）を通じて行った。

(3)さらに 17 世紀を中心とする「初期バロック音楽」ならびに「中期バロック音楽」に注目しながら、同時代の宮廷や教会（修道院）におけるチェコ音楽発展の諸相を、政治史・社会史の視座も含め、特に当時チェコ国内に留まることのできたカトリック信奉者の音楽活動に焦点をあて、チェコ語文献や資料を駆使して調査した。ここではボヘミア地方の修道院(Osseg）におけるカトリック教会音楽の発展史、並びにイエズス会のオルガニスト A.V.ミフナによるポリフォニー様式についての検証、さらに中部チェコの地方カペレの実態についてより詳しく考察を進めていった。他方、ハプスブルクの帝都ウィーン宮廷の音楽生活にも言及し、17 世紀ウィーンとチェコのオロモウツ宮廷間における文化交流についても比較の視座から調べ、同時代の都市プラハと帝都ウィーンとの文化比較を試みた。

(4)また 18 世紀におけるボヘミア文化の諸相を明らかにするために、ボヘミアにおける後期バロック音楽と宮廷社会の有り様について、18 世紀を代表する英国の旅行家チャールズ・バーニーの旅行記に綴られたボヘミア、モラヴィア両地域の文化的状況の記録を参照しながら、教育制度を含む都市プラハの音楽生活の実態を探究していった。一方、「民族復興」の時代に向けて、チェコ地域の音文化と社会との連動性、およびハプスブルクの文化政策とも関連づけることで、劇音楽・教会音楽・器楽などの諸分野における発展の様態について明らかにした。

(5)研究の纏めとしては、入手できた文献を丹念に読み進めながら、「チェコ・ルネサンス音楽」および「チェコ・バロック音楽」の発展の全体像を構築しつつ、都市プラハの様相や、宮廷社会での音楽生活や音楽作品および作曲家たちの動向を、『地域学論集』に纏める他、「中欧ヨーロッパ研究会」や「日本－チェコ協会」主催の講演会等を通して順次発表を行った。

４．研究成果

(1)「中欧史研究」および「中欧文化史研究」の一環として、これまでヨーロッパ文化史や音楽史文献、特に「チェコ音楽史」に関する諸資料の入手に努めながら、ボヘミア王国がハプスブルク帝国の一諸領邦となって独立性を失う 1526 年以前とそれ以降の歴史的背景について、それをハプスブルク帝国史との関係性のもとに洞察しながら、かつて中世ヨーロッパ文化として繁栄をきわめたカレル四世の時代から、宗教改革者ヤン・フスによる「フス派革命」の時代、さらには 17 世紀初頭に勃発した「白山の戦い」後の時期から 18 世紀後半の「民族再生」の時代に至る複雑なチェコ史の系譜を、「ハプスブルク史」と「チェコ史」等の歴史的文献を通して詳細に把握し、その成果を『地域学論集』に纏めた（2008 年度、主な発表論文を参照）。また科研費により購入した『ニューグローブ世界音楽事典　全 21 巻』や、ルネサンス時代およびバロック時代の「社会と音楽」の様態を扱った諸文献を読み進め、政治史・社会史・文化史・音楽史の視座から、まず 16 世紀の「都市プラハ」の状況をひもときながら、何よりもルドルフⅡ世（RudolfⅡ:在 1576-1612）の

時代に「声楽ポリフォニー」の最盛期を迎え、輝かしいチェコ後期ルネサンス音楽が開花したこと、当時プラハの宮廷には皇帝自ら居城に移り住むとともに、ヤコブ・レニャール、フィリップ・ド・モンテ、クラウディオ・モンテヴェルディ、ルカ・マレンツォ等のイタリア人作曲家（何れもイタリアの名だたるマドリガリストたち）がプラハに多く居住し活躍したことによる音楽都市プラハの繁栄の様子や、さらに皇帝の宮廷に倣うようにして、南ボヘミアのチェスキー・クルムロフに居城を構えたロジュムベルク家における音楽活動等について貴重な知見を得ることができた。

換言すれば、16 世紀末～17 世紀初頭に在位した「ルドルフ II 世の統治時代における都市プラハの芸術文化の発展」に関しては、特に R.W.エヴァンズの文献を参照しながら、ヨーロッパで最も重要な音楽都市の一つであったプラハ宮廷を舞台に、後期ルネサンス時代の中欧文化の諸相を読み解き、そのような宮廷の庇護の下に、チェコ文化もまた、再びヨーロッパ文化の地平で、その輝かしい繁栄を成し遂げたという史実について、概ね明らかにすることができたといえる。

(2)上記（1）の成果を通して得た歴史研究の知見を踏まえ、続く 16 世紀末から「白山の戦い」（1620）に至るまでのチェコ・プロテスタント音楽家らによる、17 世紀都市プラハでの活躍を跡づけるとともに、プラハの各宮殿に雇用された歌手や器楽奏者たちの音楽活動について明らかにしていった。即ち、当時フス穏健派からなる「知識人組合（リテラーツカー・ブラトルストヴァ）」に所属していたウトラキスト派のトゥルノフスキーや、その伝統を継承したリフノフスキー、さらに貴族出身のハラント（1564～1621）ら、後期ルネサンスの主要な作曲家たちが、新しい市民文化を先導する役目を担いつつ、ボヘミアでもモラヴィアでも「知識人組合」と名乗る合唱団が教会の儀式に参加し、土着のフォークロア音楽の要素を摂取しながらチェコ語による合唱音楽を推進しようと、民主的な環境のもとで、典礼用聖歌集である＜カンツィオナール＞の創作活動に尽力し、彼らは 16 世紀に漸くこの地に導入されることになった声楽ポリフォニーの技法を取り入れて、地方の音楽文化を先導する重要な担い手となった。換言すれば、この時代のフォークロア音楽がプロテスタントのフス派の賛美歌に吸収されることによって、チェコ民族の文化的アイデンティティの形成に繋がる基盤がつくられようとしていたと考えるに至った。

確かに、16 世紀末のプラハを中心とした輝かしいチェコ後期ルネサンス音楽の開花や、フス派の賛美歌＜カンツィオナール＞の美質、加えてカトリック教会音楽家の活躍等、1620 年までの「チェコ・ルネサンス音楽」を中心とするポリフォニー音楽について、それぞれ入手した文献や楽譜を通して多くの知見を得るとともに理解を深めることができたといえる。

(3)続いて 1620 年以降のバロック期においては、チェコ諸領邦の政治・社会的状況がまず一変したことを歴史文献を基に正確に把握することから始め、ヨーロッパを震撼させた三十年戦争中（1618～1648）に勃発した「白山の戦い」（1620）により、14～17 世紀にかけて民謡を摂取しながら発展を遂げてきたフス派の＜カンツィオナール＞を含め、チェコ人の創作は、爾来、専ら儀礼的なカトリック教会音楽という狭い分野に限定される一方、プロテスタント系チェコ人貴族や知識人、音楽家、とりわけ優れた世俗音楽の作曲家は国外へと相次いで亡命し、ここにチェコ人亡命の時代が幕を開ける。こうしてチェコ民謡は、カトリック教会の＜カンツィオナール＞に吸収されるようになり、またフス急進派の「チェコ兄弟団」の賛美歌は、バロック期になるとコメンスキーに受け継がれていった。つまり「白山の戦い」後のチェコでは、ローマ・カトリック教会という限定された中での「声楽ポリフォニー」の継続的発展をみることとなったのである。

このように 17 世紀から 18 世紀を通じて多くのチェコ人が体験したのは、受難の時代であり、イエズス会でオルガニスト兼作曲家を務めた初期バロックを代表するアダム・バーツラフ・ミフナ（1600-76）はポリフォニーとホモフォニー双方での作曲を試みるとともに、彼の作品には地方主義的な発展の様相が映し出されていることを理解した。さらにミフナや J.D.ゼレンカらの作品には、単に民謡の要素だけでなく、その精神までもが深く音楽に浸透していることが表明された。このように、ハプスブルク家への属国を決定づけた「白山の戦い」後の疲弊した 17 世紀の「チェコ音楽」を取り巻く社会、加えてローマ・カトリック教会の強力支配というきわめて限定された条件下での声楽ポリフォニー発展の諸相、それらがプロテスタント系の＜カンツィオナール＞からルネサンス・ポリフォニー技法を踏襲し、同時にフォークロア音楽の語法を駆使するといった点に注視しながら、その成果を「17～18 世紀チェコ音楽における受難の歴史」として『月刊都響』に発表した（2010 年度、主な発表論文を参照）。

(4)ハプスブルク帝国下のチェコ諸領邦における宮廷の文化史に関する具体的な事例研究として、17 世紀のチェコ諸領の宮廷で展開された宮廷楽士団、即ち「宮廷カペレ」の活動実態について、その詳細を明らかにした。とりわけ盛期バロック文化を熟成期へと導いた、モラヴィア中部の宮廷文化を代表する

「オロモウツ・カペレ」の様態について、『地域学論集』(2009 年度、研究成果報告を参照)に纏め発表した。即ち、バロック期のチェコ社会と音楽文化の展開をハプスブルク帝国の文化政策を踏まえつつ、1620 年の壊滅的な「白山の戦い」後に、最も優れた音楽文化創成の地となった「オロモウツ宮廷カペレ」の器楽を中心とする卓越したバロック音楽の諸相を、同時代の普遍的なイタリア音楽とも比較しつつ、そうした普遍的なヨーロッパ文化の地平で、周縁文化の創成が前者に匹敵するレベルを誇っていたことに着目するとともに、改めて「中心と周縁」といった視座から、ヨーロッパ芸術文化のダイナミズム（動態性）について再考するに至った。

(5)18 世紀以降の、ボヘミアやモラヴィアにおける後期バロック音楽と宮廷社会の有り様について、18 世紀を代表する英国の旅行家 Ch.バーニーの紀行文を通して、教育制度を含む都市プラハやモラヴィアの音楽生活の実態をよりリアルに明示することが出来たと考える。この 18 世紀を代表する英国旅行家・作家の記録から読み取れるものは、17～18 世紀のいわゆる被支配が強化された時代にみるボヘミアやモラヴィア両地方の文化的状況を歴史的に解き明かすものであり、都市の発展状況と音楽文化の発展の様相が相互に連動することを証明しながら、いかにして 19 世紀の文化ナショナリズム運動を内発的に促す事象を可能としたのかを検証する意味でも、ハプスブルク帝国下のチェコ社会と音楽文化の発展を社会史的に研究する意義はきわめて重要であると考えた。

(6)これまで知見として積み上げてきた「チェコ・バロック音楽の全容」について、政治史・社会史等の視点を含めた立体的な視座から総括的作業を進め、宮廷社会における「カペレ」の実態とともに、教会音楽をも含め、最終の纏めを行った。こうして 19 世紀「国民楽派」に至るまでの、まさにチェコ音楽の「歴史的創成のダイナミズム」として描く内容は、１）チェコ・ルネサンス文化の隆盛と都市プラハの繁栄、２）チェコ・バロック音楽と地方都市における「宮廷カペレ」の実態、３）チェコ・プロテスタント勢力による亡命地マンハイムでの前古典派音楽の発展、４）ローマ・カトリック教会の優勢とプラハの「文化的再生」の試み等、入手した多くの貴重なチェコ語文献や独語文献を駆使しながら、ハプスブルク帝国の属国下にあったチェコ地域にみる音楽文化の特質が、いかにして 19 世紀のチェコ音楽へと昇華されていったのか、つまりその発展史がどのようにヨーロッパ文化全体のそれと関係づけられるのか、その纏めを『Philharmony』誌（2011 年度、主な発表論文を参照）に発表した。そしてこうした中欧の小国チェコの音文化の知られざる歴史を、まさにヨーロッパ文化史の中に位置づけて解明しようとした本研究の意義は、きわめて重要であると結論づけた。

このようにハプスブルク帝国下のチェコ地域に開花した教会音楽と世俗音楽の動向を、ヨーロッパ文化の普遍性とどのように結びつけるのか、さらに限定された条件下での「チェコ音楽」の発展の様相を、「動態性」や「中心と周縁」といった視座から体系づけていくことを目指しつつ、我が国では殆ど知られざる中欧の音楽文化史の一端を、社会史の側面からも詳細に明示することができたと考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① 内藤久子、「名曲の原風景　ドヴォルジャーク《新世界から》の源泉を探る」Philharmony（NHK放送協会）、第 83 巻第６号、78～80、2011、査読有.

② 内藤久子、「チェコ音楽－その受難の歴史－」、月刊都響（12 月号）、No.272、48～52、2010 年、査読有.

③ 内藤久子、「ハプスブルク帝国下のチェコにおける宮廷の文化史－17 世紀バロック期における『宮廷カペレ』の諸相」、地域学論集、第 6 巻第 2 号、179～195、2009 年、査読無

④ 内藤久子、「B.スメタナの連作交響詩《わが祖国》の美学－19 世紀ボヘミアにおける「近代芸術」の指標、Philharmony（NHK 放送協会）、第 81 巻第２号、15～30、2009 年、査読有.

⑤ 内藤久子、「文化による『チェコ民族再生』－ハプスブルク帝国下のボヘミアにおけるナショナリズムの動向」、地域学論集、第５巻第 2 号、157～176 頁、2008 年、査読無.

〔学会発表〕（計２件）

① 内藤久子、「チェコ・ピアノ音楽の系譜」（招待講演：関西チェコ・スロヴァキア協会創立 50 周年記念講演)）、関西チェコ・スロヴァキア協会（在神戸チェコ共和国名誉領事館後援)、2011 年 3 月 19 日、世良美術館（神戸).

② 内藤久子、「チェコ音楽とナショナリズム－民族的闘争の時代－」（招待講演)、大阪大学大学院人間科学研究科グローバルＣＯＥプログラム「コンフリクトの人文学 、2010 年 12 月 3 日、大阪大学.

〔図書〕（計１件）

① 内藤久子、音楽之友社、『作曲家◎人と作

品シリーズ　ドヴォルジャーク（第３版)』単 著 、2010 年、270 頁.

６．研究組織
(1)研究代表者
内藤　久子（NAITO HISAKO）
鳥取大学・地域学部・教授
研究者番号：６０２６３４５６